

新型コロナウイルス感染症対策が緩和され、運動会、発表会など大勢の前で大きな行事を体験した子どもたちは、発表する楽しさやみんなで協力してやり遂げた達成感を味わい、一段と成長した姿が見られたのではないのでしょうか。今回はコロナ禍で3年間延期になっていた「保幼小連携運動遊び指導者研修会」と「第4回幼稚園教諭・保育士合同研修会」テーマ「子どもの主体性を育む保育」の研修内容をご紹介します。

保幼小連携運動遊び指導者研修会（8月21日・22日 萩中集会所にて）

2日間で小学校教諭39名、幼稚園教諭8名、保育園保育士86名計133名が講義、グループ討議、実技を行い園や小学校の先生方で意見交換や情報交換をし、多くの笑顔が見られた研修会になりました。

幼児期から小学校低学年に共通する「運動遊び」の心理的・身体的な効用及び発達に即した理論と幼児・児童が楽しみながら意欲的に運動に取り組むための指導力向上と、保幼小間で連携を図りながら乳幼児期からの連続性を踏まえた体力向上を図ることを目的とし、NPO 法人運動保育士会 運動指導員 進藤 歩先生をお迎えして研修を行いました。

講義では、子どもたちに「休みに何をした？」と聞くと運動系の話が出てこない。原因として考えられることは、①室内遊びが充実してしまっている②高齢化が進み、公園が無くなり、外の遊び場が減少していて、自分たちが子どものとき出来ていたことが環境的に難しくなっている、という2点が考えられる。ゲームやスマホをやって姿勢が悪く、体力がない児童が増えている。全ての基本の動きは支持力（開脚跳び、側転につながる）・懸垂力（逆上がり、連続技につながる）・跳躍力（大縄跳び、短縄跳びにつながる）で運動をすることにより、その時期にやると伸びることを考えると、運動や外に出ることは大事である。幼児期の運動遊びは習得が目標ではなく基本的な力をつけて、体を動かすのが好きになるのが目的。学童期になると「運動遊び」から「運動」に変わる。「評価」が入ってくる。個人差を考えて、苦手なものにチャレンジしていくことができる場を作っていく。苦手なことを分解してどこで躓いているのかを考え戻って繰り返しやる。という内容の話がありました。



グループワークでは、4～6人グループで運動が苦手、嫌いにならないために、乳幼児期、学童期にそれぞれ必要なこと、現場の様子や共通することは何か、話し合いワークシートに記入しました。保育園、幼稚園、小学校の現状や工夫が紹介され、話が盛り上がっていました。28グループ中4グループに発表してもらい、保幼小間で情報交換、共有ができて良かったという意見が出ました。

体育館に移動して、実技指導を行いました。準備体操後、バランスあそび、指示に従って動く（前・後ろ）指示と逆に動く（前→後ろ、右→左）3～4チームに分かれて、サーキット遊びの中に、クマ歩き、カンガルー、ウシガエルを取り入れて、アレンジを加え、ポイントを押さえ、動きをストーリー仕立てにする。動きを分解して目的や目標をしっかりと伝え、スモールステップを刻む。体育館の中に、「きつい」「難しい」「楽しい」と大きな笑いが起こりました。



感想

- ・改めて保育園、幼稚園の先生方と連携していくことの必要性を感じた。保幼小がカリキュラムなどの情報交換しても面白いと思った。
- ・講義、意見交換、実技と充実した内容で、学びを深められた。
- ・実技をすることで、体のどの部分を使っているのか自分が出来ない所はどこかを確認でき、どこをどう取り入れていけばいいか実感することができた。
- ・簡単な動きでもやってみると大変だが、引き出しが増えた。